

1. 建設投資の動向

》建設投資の推移



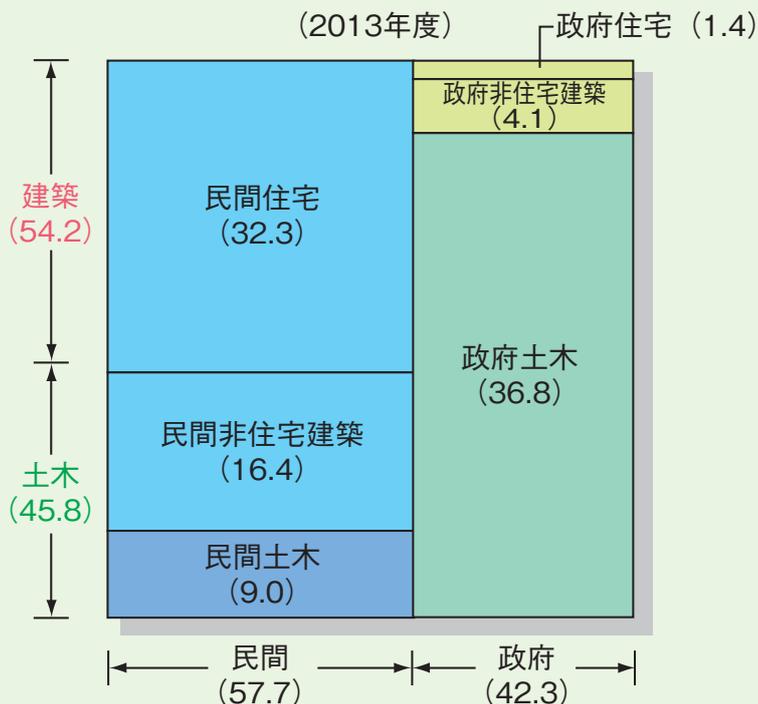
(注) 1. 12、13年度は見込み額、14年度は見通し額

2. 政府建設投資のうち、東日本大震災の復旧・復興等に係る額は、11年度1.5兆円、12年度4.2兆円と見込まれている。これらを除いた建設投資総額は、11年度40.4兆円（前年度比3.6%減）、12年度40.7兆円（同0.6%増）。

資料出所：国土交通省「建設投資見通し」（2014年6月発表）

建設投資は90年代後半以降、減少傾向が続いた。近年では、リーマンショック後の景気悪化により急減し、2010年度にはピーク時（92年度 84兆円）の50%にまで減少した。11年度に震災復旧需要で増加に転じ、3年連続して増加していたが、14年度は前年度比0.5%減となる見通しである。

》建設投資の内訳



建設投資を発注者別にみると、民間部門が全体の57.7%、政府部門が42.3%を占める。工事別では建築が54.2%、土木が45.8%。民間投資の大半は建築工事、政府投資の大半は土木工事である。

(注) () 内は投資総額を100とした場合の構成比
資料出所：国土交通省「建設投資見通し」



建設投資の地域別構成比

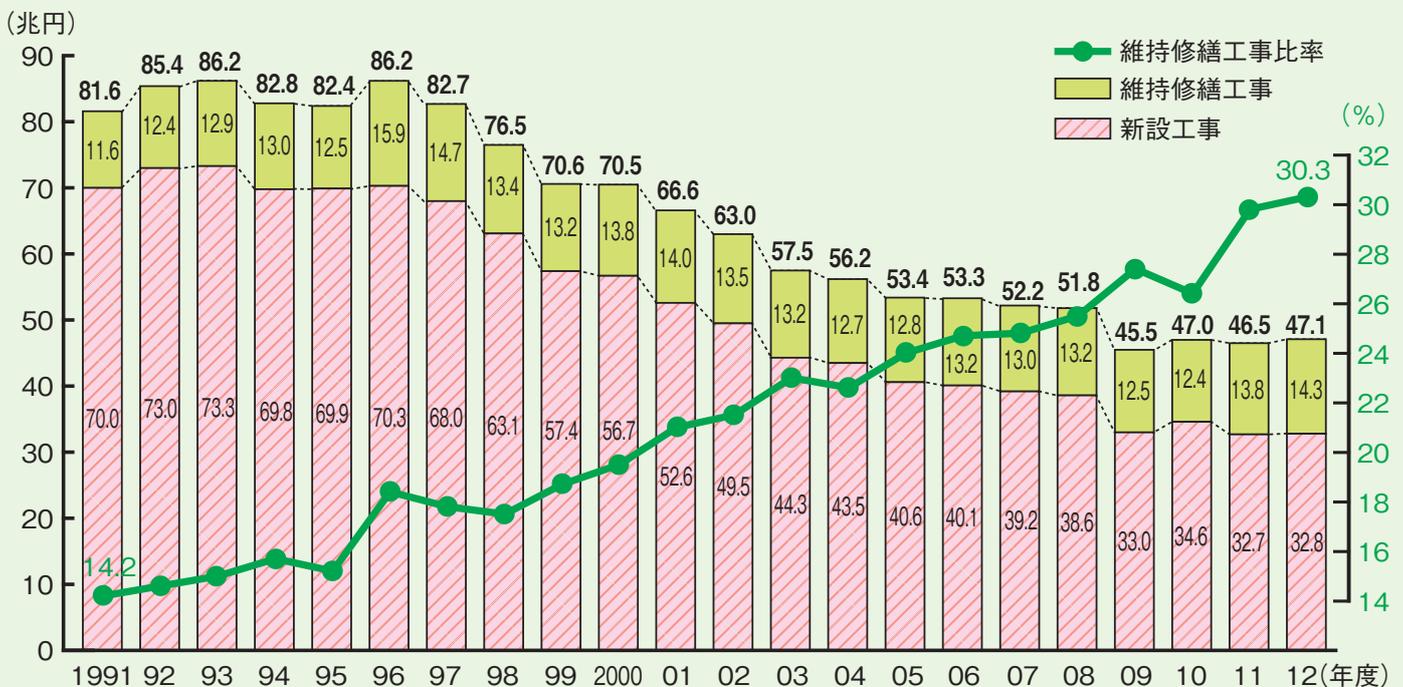


建設投資を地域別構成比で見ると、90年代はバブル崩壊の影響を大きく蒙った大都市圏（特に関東地方）において比率の縮小が顕著であったが、2000年代に入って拡大に転じた。これは、公共投資依存度の高い地方圏に近年の公共事業抑制の影響がより大きく及んでいる一方、大都市圏では民間投資が相対的に堅調であったことによる。

12年度以降は、東日本大震災被災地の復旧・復興に向けた投資の集中により東北地方の比率が拡大している。

資料出所：国土交通省「建設投資見通し」

維持修繕工事の推移



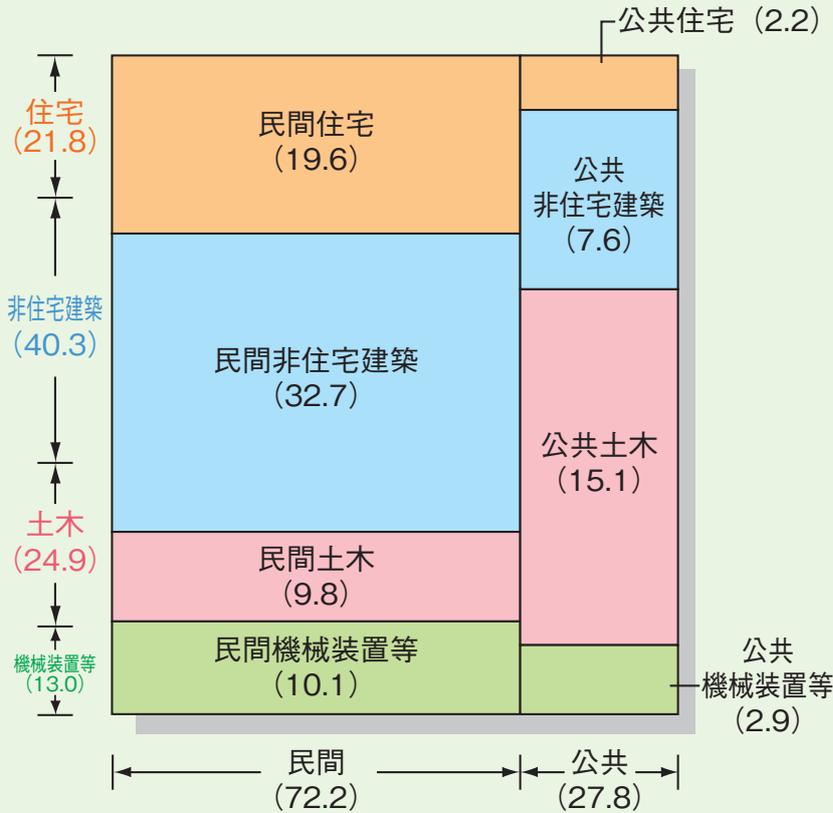
(注) 1. 金額は元請完成工事高。建設投資（前頁）との水準の相違は両者のカバーする範囲の相違等による。
2. 維持修繕工事比率＝維持修繕工事完工高／完工高計（いずれも元請分）

資料出所：国土交通省「建設工事施工統計」

新設工事の減少が続く中で、ストックの増加を背景に維持修繕工事は10兆円台で安定的に推移している。元請完成工事全体に占める割合をみると、90年代後半以降は上昇傾向にあり、2012年度は30.3%である。

》維持修繕工事の内訳

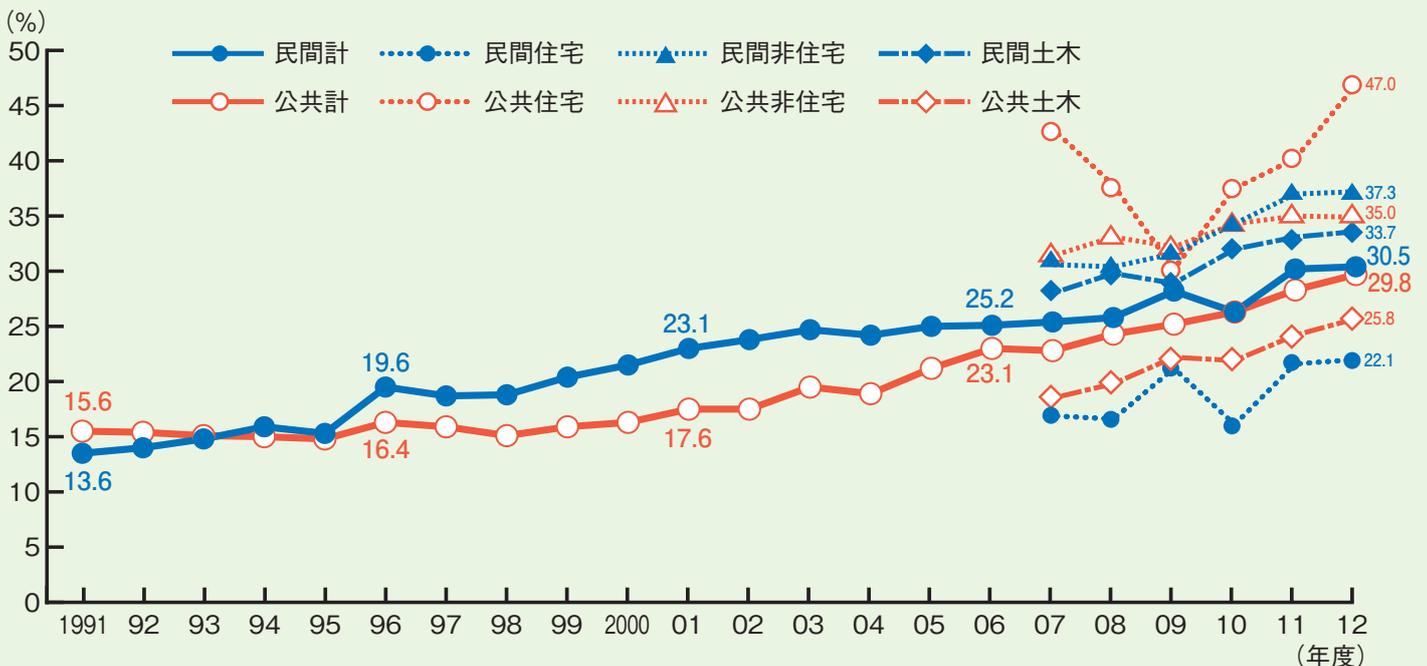
①2012年度の維持修繕工事（構成比）



維持修繕工事は、発注者別では民間工事が全体の7割強を占め、工事種別では、非住宅建築工事が4割を占めている。維持修繕工事比率を発注者別にみると、民間、公共ともに90年代後半以降上昇傾向にある。特に公共工事は、社会資本ストックの老朽化を背景に、比率の上昇が顕著である。

(注) 機械装置等工事：工場等における動力設備、配管、機械器具装置等の工事及び変電設備、屋内の電信電話設備等の工事（建築設備を除く）

②民間・公共別の維持修繕工事比率

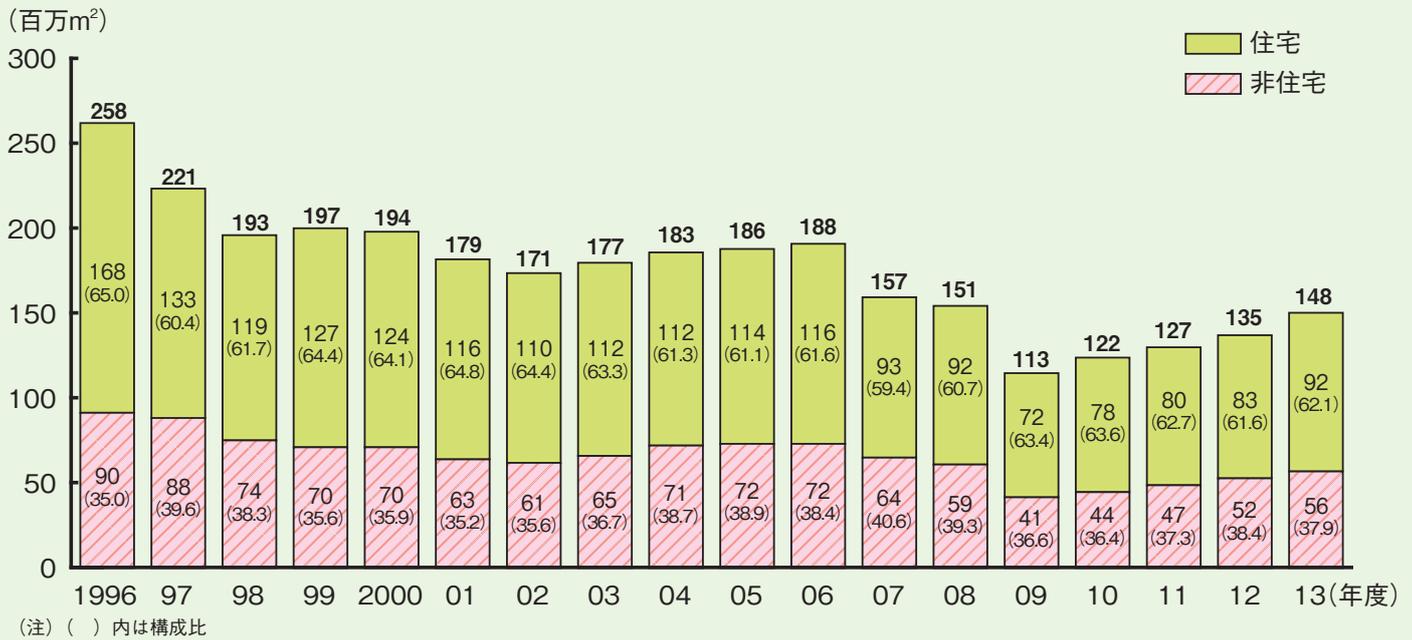


(注) 維持修繕工事比率＝維持修繕工事完工高／完工高計（いずれも元請分）

資料出所：国土交通省「建設工事施工統計」

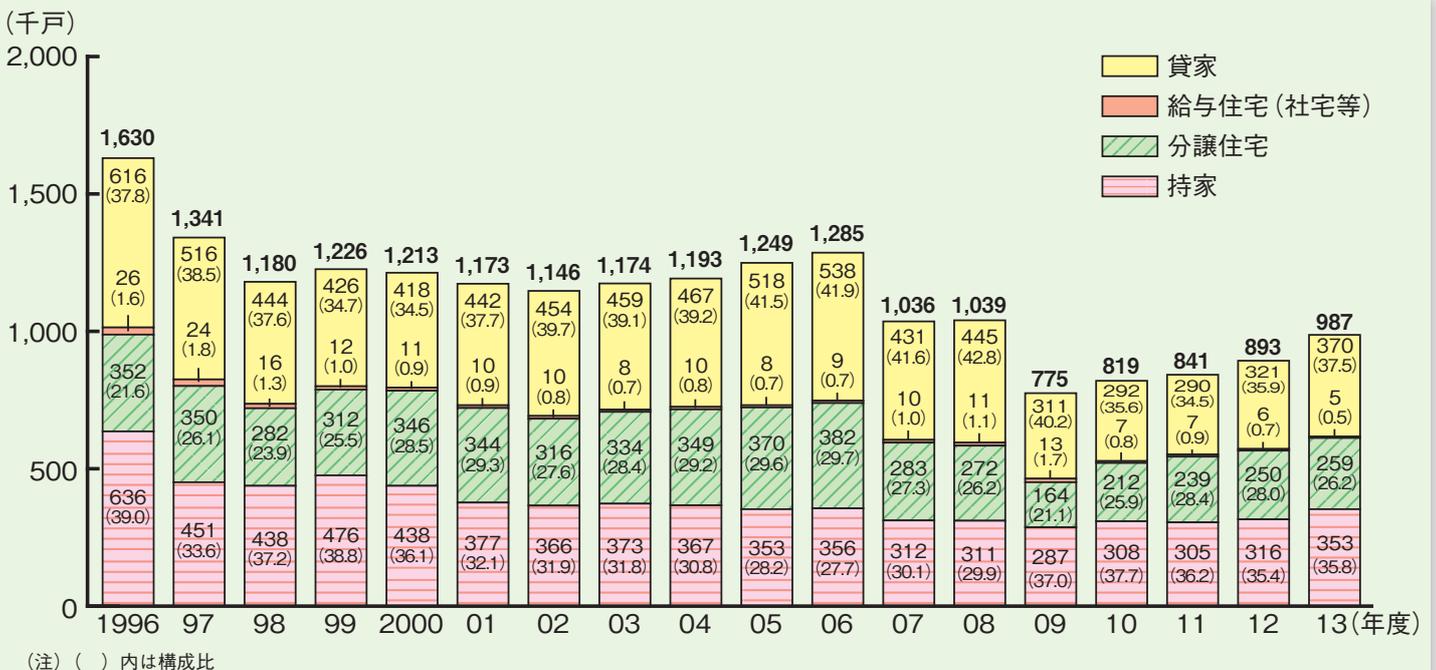
2. 建築需要の動向

》 建築着工床面積の推移



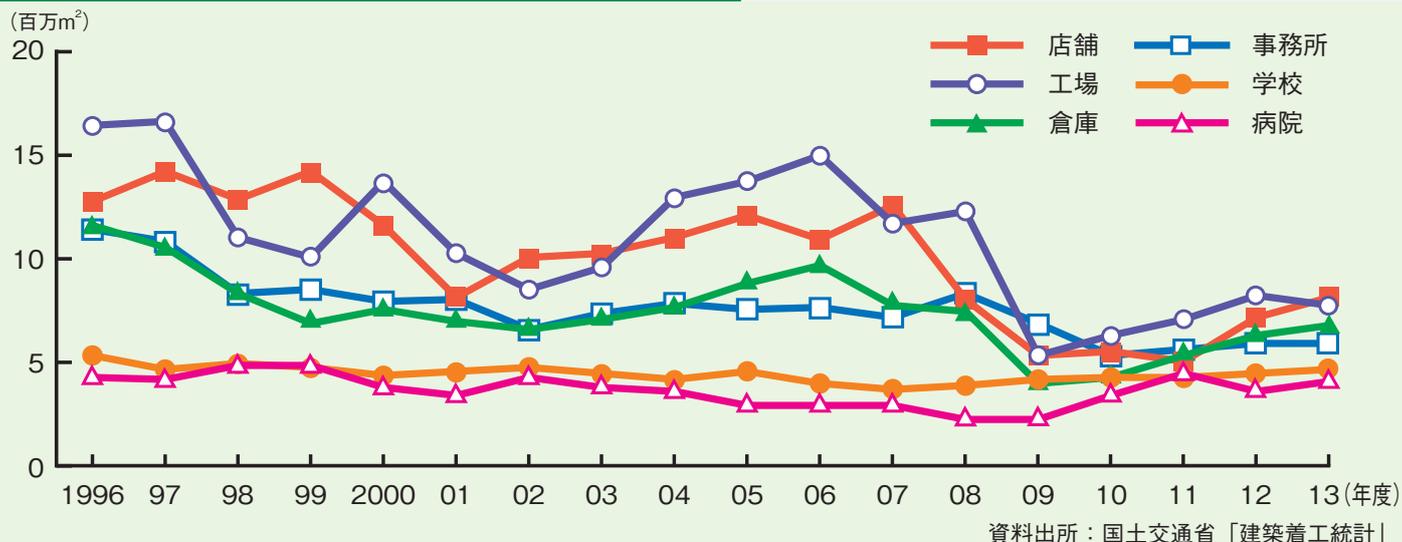
建築着工床面積は、07年度に改正建築基準法施行の影響で大幅減となった後、08年度からの景気の急激な悪化により、09年度も再び大幅に水準を下げた。10年度以降は4年連続で増加しているものの、08年度の水準には達していない。

》 新設住宅着工戸数の推移



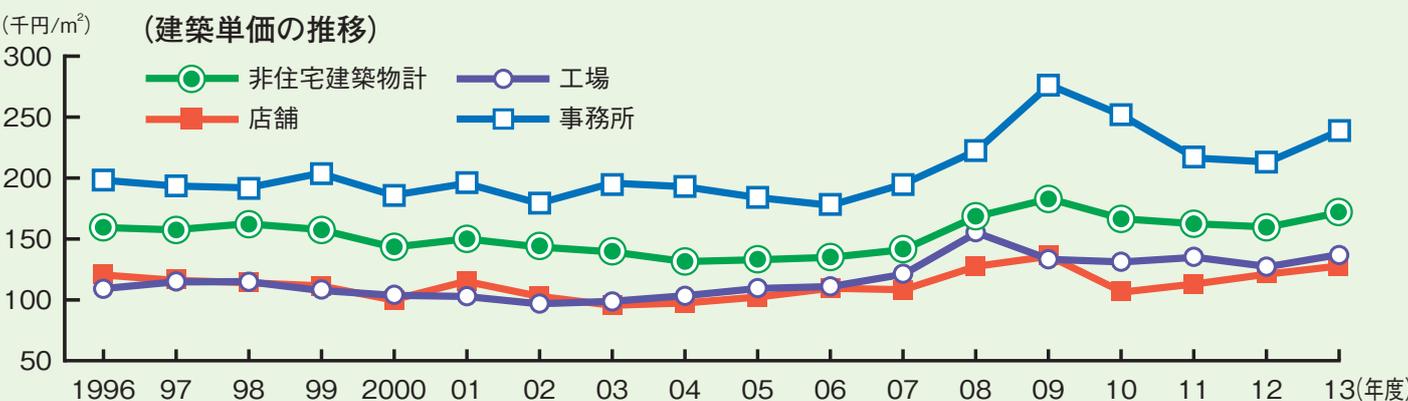
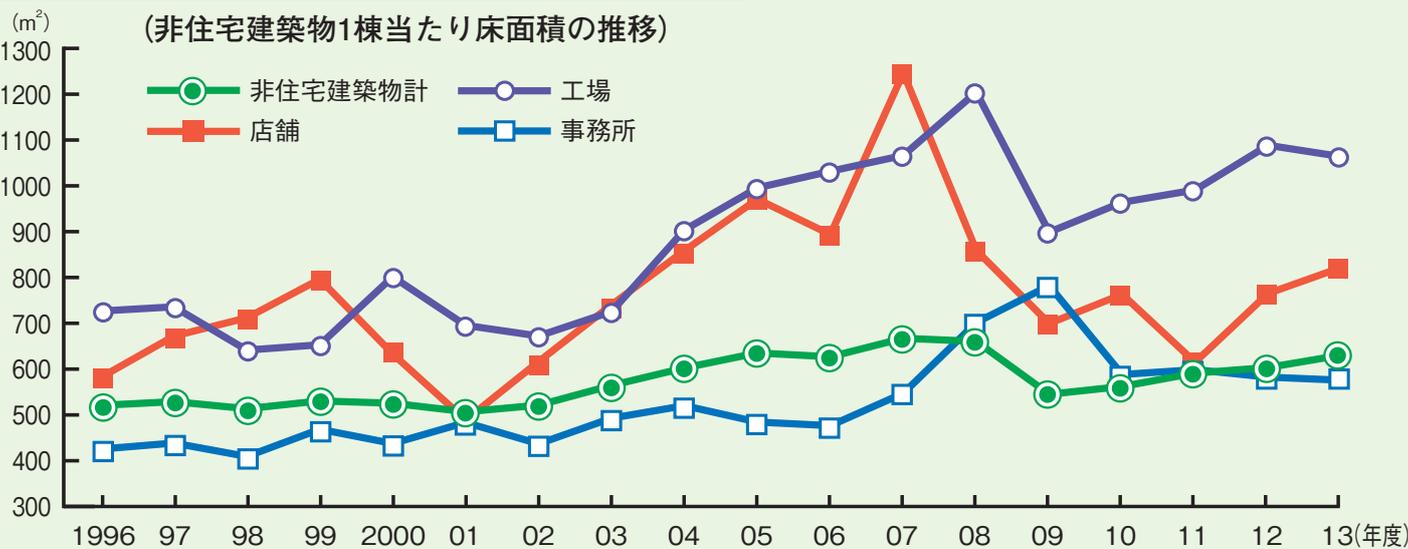
近年の住宅着工戸数は、07年度の改正建築基準法施行の影響や、リーマンショック後の急激な景気悪化を背景に貸家、分譲住宅が大幅に落ち込み、09年度には70万戸台にまで水準を下げた。その後は4年連続で増加し、13年度は98.7万戸（前年度比10.6%増）となった。利用関係別では、持家と貸家が消費税率引上げ前の駆け込み需要と、東日本大震災被災地の住宅再建の本格化により大幅に増加した。

》非住宅建築着工床面積の推移



13年度の非住宅建築着工床面積を用途別にみると、工場が減少、事務所が前年度と同水準となったが、他の施設は増加。店舗と病院は1割を超える増加となった。

》非住宅建築物の規模と単価



(注) 非住宅建築物の用途別内訳は代表的な3施設のみを示す。

資料出所：国土交通省「建築着工統計」

13年度の非住宅建築物の特徴を規模と単価の側面から見ると、規模（1棟当たり床面積）は09年度の大縮小の後、4年連続の拡大。建築単価は10年度に6年ぶりに下落し、3年連続で低下していたが、13年度は上昇した。

3. 公共工事の動向

》発注機関別請負額の推移



(注) () 内の数字は発注機関別構成比

資料出所：北海道建設業信用保証(株)、東日本建設業保証(株)、西日本建設業保証(株)「公共工事前払金保証統計」

公共工事請負額は98年度に過去2番目の高水準を記録して以来、公共事業予算の抑制により減少傾向にあったが、08、09年度は景気刺激策としての予算追加等により若干増加した。その後は再び減少したが、13年度は復興関連予算執行の本格化等により、前年度比17.7% (約2.2兆円) 増となった。

》施設別構成比の推移



(注) 1. グラフ内の数字は年度計に対する構成比

2. 「産業基盤・その他」：港湾空港、鉄道軌道等 「生活基盤・その他」：土地造成、上・工業用水道、庁舎、災害廃棄物処理等

資料出所：北海道建設業信用保証(株)、東日本建設業保証(株)、西日本建設業保証(株)「公共工事前払金保証統計」

公共工事を施設別構成比で見ると、「道路」をはじめとする産業基盤インフラは90年代後半以降、比率が拡大傾向にあったが、近年は縮小している。

その一方で、生活基盤インフラは拡大しており、特に2011年度以降は「教育・病院」及び「住宅宿舎」、東日本大震災被災地のがれき処理等を含む「その他」の拡大が著しい。